



ふくち いくこ
 旭川生まれ 1981年より北海道自然保護協会理事を経て北海道自然保護協会理事と講習会講師
 現在北海道自然保護協会常務理事として自然保護指導員、自然観察指導員、北海道自然観察指導員連合会理事、北海道植物友の会会員、北海道文庫『花ある風景』の編集者

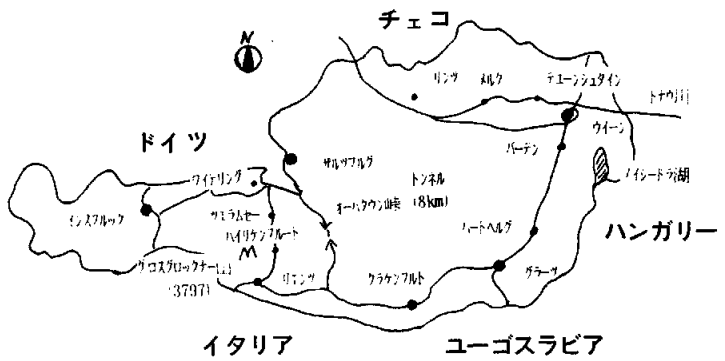
オーストリア 花の旅

—魅力ある風景—

福地 郁子

オーストリア花の旅に出かける機会を得たのは、まるで予期せぬ出来事のようにある日突然やってきた。九一年十二月にウィーン大学修士課程を終了し、九二年一月五日オーストリアからアンゲラ・クラマー (Angela Kramer) が我が家にやって来た。主人とは一年前サンアントンで知り合い、日本に来ることで連絡を取り合っていたようだ。植物のセリ科シシウド属の属名 *Angelica*、天使の *Angel* とも呼べるアンゲラは植物好きの私には縁があるお嬢さんのようであった。

就職先を見付けること、それに伴う書類を揃えることなどで約五カ月が過ぎた。五月に就職先も決ま



り、出入国管理事務所の書類審査(就労ビザ)の結果が一〜二か月後となるため、オーストリアで待機することとなった。そこでアンゲラの両親の勧めで、アンゲラに同行することが決まり慌ただしく準備をし、約一か月の予定で、五月二十七日にオーストリアに向け出発した。

ソウルに一泊して、ドイツ・フランクフルト経緯で夜十一時、白熱灯がダイヤモンドのように点灯するビエンナ(ウィーン)空港に到着。アンゲラのお母さんと弟の出迎えを受け、アウトバーンを約一時間でアンゲラの家のある、シュタイヤマルク州のハートベルグについた。

編集委員などがかかわった、『札幌の植物』(九二・五・二五 北大図書刊行会出版)をアンゲラのお父さんへおみやげとしたところ、フクチは自然好き、植物好きと思われて、一般的な観光地だけではなく自然保護区、野鳥保護区、山や湖に案内され一味違った旅となった。以下日付順に述べたい。

ハートベルグ、グラーツ周辺の古城や森、沼を訪ねる(五・二九〜六・四)

澄んだ鳥の声が目覚める。ツグミ科のアムゼル(和名クロウタドリ)という鳥が良い声で鳴いていた。クラマー家の約二〇〇〇㎡の敷地にはサクランボウ、ウメ、ナシ、カングルミ、キイチゴなどが植えられている。カササギ、アオゲラかヤマゲラ、アカゲラ、ハト、クロジョウビタキがよく見られた。また私のステイした部屋のベランダの軒でクロジョウビタキが巣をかけていた。

時差ボケもなく、早速人口六五〇〇〇人のハートベルグ市内のウォッチングにでかける。オーストリアの東に位置し、アルプスの始まりとなるゆるやか

な丘が続く。丘にはワイン用ブドウ畑とオオムギの畑が広がっている。市内には古い昔の城跡、城砦が見られ、風化した城砦の壁の透き間からシダの仲間（イワデンダ）やツタバウラン（Cymbalaria hirta）などの仲間が飾りのように育ち歴史的風情をだしていた。マロニエ（セイヨウトチノキ）の花咲く町の石積み煙突の上には、コウノトリが繁殖用の巣をかけており町の雑踏を見下ろしている。こんな大きな鳥が餌を取れる環境を維持していることが羨ましかった。又、近くの沼や森もたづねた。

オーストリアで二番目に大きい都市シュタイヤマルク州の州都グラーツにでかける。歴史ある大都市で、数多くの大学があり学生も多く活気がある。古い建物もよく手入れされ、建物をひきたてる壁の彫刻や細工はおしゃれで、町全体に清潔な印象を受けたが、難民と思われるお乞食さんが各所で見られた。市内のどこからも見られる、十六世紀に建築の時計塔のある城山から眺める町の景色は、こげ茶色の古い瓦屋根が段々と続き、こんもりとした緑が各所で見られる。その中、両サイドに細長く緑が続き、アルプスの雪だけ水を豊かに集めて流れるムーア川がある。この大都市の中にあり、悠然と流れる姿が自然で大変美しいと思われたのは、護岸を緑でスッポリと覆っていることが起因のように思われる。いろいろな治水対策の方法の内、より自然に近い河川改修の工法を使い、現在の川の景観を保つようになったのであろう（写一）。

アルプスをハイキングし、湖や湿原を訪れる（六・五）

今度の旅行での一番の楽しみにしていたコースである。ハートベルグよりアウトバーンを利用してド

イツに近いチロル州ワイディングに向かう。アウトバーンは制限速度一三〇kmとなっているが実際には一五〇km以上で走行していた。途中、オーストリアで二番目に長い八kmのトンネルを通る。莫大な工事費がかかり、かつ自然を破壊したための修復にと、トンネル入口で四〇シリング（約六〇〇円）を払ったが、山を切って道路を付けるよりましと思われた。残雪のある標高二二〇〇mのオーバータウン峠を越え、途中、ツェラムジーという大きな湖がメイソンのリゾート地を通る。日本の観光地の喧騒さが身に沁みているので、静かなたすまいの町並と湖の景観の素晴らしさが嘘のようで信じられなかった。



写1 グラーツの城山よりムーア川



写2 ワイディングのホーゲルテネン山荘92. 6月

夜十時すぎワイディングに無事到着する。クラウマ家の山荘・ホーゲルテネンは、築後八一年を経ている上、約半年閉め切っていたため空気の流通がないなど独特な木臭とカビ臭い匂がし、歴史あるヨーロッパの国に来たと実感した（写2）。

私の泊まった部屋は三階の「潜る部屋」という部屋で、壁をくりぬいて二つのベットが付いている十五畳ほどの広さで、大変見晴らしの良い部屋である。目の前に、庭のドイツトウヒやムラサキバナを通して二〇〇m以上の石灰岩の山々が並び、雄大な景観を楽しむことができた。山荘は開けていない部屋もあって全部は見られなかったが、アンゲラの両親が使っている「コウモリの部屋」、家族で使える三部屋続きの「青の部屋」、「白の部屋」、三部屋（応接室を含む）続きで、この山荘を建築した「大おじいさん達の部屋」、古い楽譜とピアノがあり、クラ

マー家の家系図が写真で掲げられている「音楽室」、ほかに「事務をする部屋」、「大食堂」、「小食堂兼休憩室」、「食器室」、「台所」、地下に洗濯室、シャワールーム、外に庇の下を利用した卓球場、など日本では考えられない広さで、古いがそれなりの設備に変えて、クラマー一族（運営管理二人）が使用している。

ラースタいの谷に行くが、既にワイディングは標高八〇〇m以上のところで、少しのぼると一〇〇〇mは越えてしまう。山や谷は石灰岩で形成され、独特な高山植物が育つと思われた。シラカバヤトウヒの類が道の両脇にあり、バラ科のナナカマドやアルペンローズ、ヒース（エリカ）が混ざって生育し、ハイマツも多く見られた。下草にハゴロモグサ、目の覚めるような濃紺のリンドウ類、ピンクのムシトリスマレ、ギンランの仲間、十五cmほどの大きさのピンクのセイヨウユキワリソウ (*Primula farinosa*) ミヤマズマガキの仲間など、魅力のある植物ばかりであった。

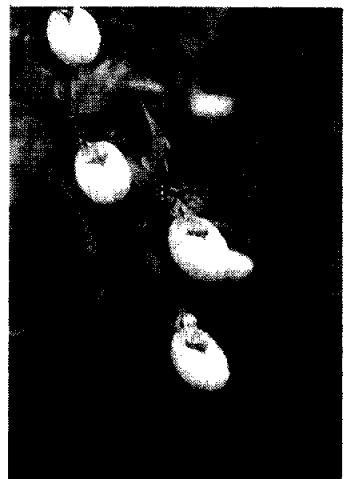
ピラ湖の辺りでセイヨウユキワリソウやキキョウ科のシデシヤジン (*Phyteuma bedraichifolium*) の仲間に出会った。この *Phyteuma* 属の植物は大変苦労してキキョウ科というのが分かった。日本には一種だが北半球に四〇種と、特に欧州に集中しているらしい。花はキキョウ科のように幾つも集まる頭花で紫色をしており、ルーペで覗くと不思議な顔をしている。

頂上が屏風岩のようになっている、約二六〇〇mのシュタインブラッテ山の途中までハイキングに行く。国道より登山口まで車で行く途中で、こんな意味の表示があった。「自然を壊して、登山口までの道路を作りました。管理のために、車一台四〇シリ

ングを寄付してください。…」と。入山料、駐車料金とも違い自発的に支払う環境料みたいなものだろうか。

登山口はすでに一〇〇〇mは越えている。石灰岩のこの山は、登山道、岩場など好天に恵まれて白く反射してまぶしいばかりであった。白花のムシトリスマレ、濃い紫色のヒメハギの仲間 (*Polysiala alpestris*) が株立ちして咲いており、チヨウノスケソウもたくさん咲いていた。まだ残雪があり、とけたところから春の花が咲いている。クロツカスの原種や、シベリヤリュウキンカ、ウルツブソウ科のルリカンザシ、サクランソウ科のアルペンスノーベルなど可愛らしい花ばかりで、ちっとも先に進まないの、アンゲラのお父さんに、「フクチは牛になったのでゆっくり草を食べておいで」といわれてしまった。といわれたが、それなりに急いで花達をカメラに収めた。樹木類は少なくモミヤトウヒが所々にあり、ハイマツが地面を覆っている。セイヨウオニシバリ、セイヨウヒメスノキなどの他に、黄色のサクランソウ (*Primula elator*) の群落、セイヨウキンバイの株立ち、キバナノコマノツメの群落と、黄色の花が多く見られた。歩いても遮るものがなく、屏風岩の下迄疲れることなくゆっくり登ることができた。展望のきく所で、遠くに中央アルプス、眼下にワイディングの町とピラ湖を望み思う存分清風を満喫した。

翌日、ドイツにいるアンゲラの叔父さんも山荘に来て、ラースタいの自然保護区に案内してくれた。そこは牧草地の隣で、ハイマツの中にイチヤクソウの類、アルペンローズ (*Rosa pendulina*)、スズラン、ウズラバハクサンチドリ等の仲間、オダマキの類、アマドコロの仲間、サクランソウの類、エリカ、



写3 ラースタイ保護区
カラフトアツモリソウ

ヒロハヘビノボラズなどがある。そして今日のお目当て、保護されているラン、カラフトアツモリソウ (*Cypripedium calceolus* L.) が見ごろに咲いていた。丈が三〇cm程、袋状で濃いクリーム色の唇弁に小豆色の側花弁と、かれんな姿で二〇株程が確認された。我が国唯一礼文島のものを見たことも無く外国で巡り逢うのも何かの縁だろうか(写3)。

又、四〇〇年続いている農家のご主人ミリンガさんが、所有の三・五畝の湿原を案内してくれる。やはり牧草地に面しているが、牧草地には色とりどりの花が咲き乱れ、濃いピンクのカッコウセンソウ (*Lychnis flos-cuculi*)、シオガマガキの仲間、フランスギク、ハイキンボウゲなど。そして湿原に入ると、じゅうたんを引きつめたようにピンクの花が咲いている。よく見ると、ツルコケモモそのものであった。歩く足の下で何十という花が踏まれる、正に足の踏み場がないのである。水たまりは花の終わったミツガシワがあり、少し乾いたところは湿原特有のカヤツリグサが茂り、特にワタスゲは大型で柄の打ったものが多く見られた。ミズゴケの中で水滴が付いてキラキラ輝く食虫植物ナガバモウセンゴケに出会う。サロベツでも見られなかったので、ここで

会える事に不思議な気がした。やはりここでもカラフトアツモリソウがあり、ミリンガさんは大事にしたいと言っていた。この小さな湿原は今年から學術調査が入る予定になっていると聞いた。

このミリンガ家の入り口には『ジンマー』のマークが付いている。民宿のマークで、台所、シャワー、寝室ともう一部屋付きで四人まで泊まれる設備が整い、一日四〇〇シリング(六〇〇〇円)で貸していた。スキー場が十二カ所あり大勢の人が集まるので、冬は二年先まで予約があると聞いた。

夜は、ツエラムジーの湖近くのレストランで、カワマス料理と無農薬ブドウのワインを堪能する。

ザルツブルグ、インスブルックから山岳観光地ハイゲンブルートへ(六・九十三)

ドイツを通過してザルツブルグへいく。町の背後の岩山にそびえ立つ、オーストリア最古のお城ホーエンザルツブルグ城からは市内が一望でき、ザルツアツハの清流がゆったりと流れる様子は時間を忘れさせる。一泊後ザルツブルグ駅より汽車でインスブルックに向う(写4)。

この汽車の旅では、ラビットカードを利用した。一〇七〇シリング(約一三〇〇〇円)で利点は発行日より一〇日間のうち四日、どの汽車でも乗り放題。更に、船や長距離バスの割引もある。駅は改札が無く、出入り自由。ただし汽車に乗ると発車することに車掌が検札に来る。カードにその利用日を押し印してもらおう。その日にはほかの汽車にいくら乗っても後は提示するだけである。

チロル州の州都であるインスブルックは、所々雪が残るノルトケツテの岩山を仰ぎ、アルプスの豊かな水を集めるイン川の流れる歴史ある古都である。



写4 ホーエンザルツブルグ城よりザルツアツハの清流

石畳の続く中、ロマネスク、ゴシックの優雅なアーケードがそのまま残され、内部を改造しておしゃれなブティック街となっていた。メイーンの「黄金の小屋根」、女帝マリヤ・テレジアゆかりの凱旋門やホーフキルヒエ教会などを見て歩いた。

夕方、イタリアを通過してリエッツという小さな山間の町に下りた。宿は、ゴールド・フィッシュという三つ星印のガストッフ(旅宿)、ツインルームで、朝食付き一人二五〇シリング(約三〇〇〇円)とベツトも清潔、部屋も広く言うことなし。

翌朝早起きして、バスで山岳観光地のハイリゲンブルート(一三〇一m)に向かった。オーストリア最高峰のグロスグロックナー(三七九七m)に氷河を見に行く予定で、定期の観光バスが出るハイリゲンブルートに行ったが、六月で観光客が少いたため一時中止となっていた。ピラミットのようにそびえ立

つグロスグロックナーを仰ぎ見ながら、牧草地を通り、近くの登山道を歩いてみた。眼下の谷間に、小さな家々、教会、民宿、ホテル、牧草畑と、アルプスの少女ハイジの風景そのもの、やはり来て良かったと感じた場所である。たくさん花が咲いており、印象に残ったのは三色スミレの原種のような、フィルドパンジー(Viola tricolor)の花が黄色から白色、中間と様々に咲いていたことであった。

憧れのウィーンを訪ね、メルクより「美しき青きドナウ」を下る(六・十五~二十)

ウィーン北駅で降り地下鉄でアンゲラの借りているアパートへ行く。今は、ウィーン大学に日本から派遣されている、東京外語大の社会学の先生がアンゲラから借りて使っている。大変交通などの便利のよいところで、部屋も三つあるので五日間そこを宿とする。

アンゲラの母校、ウィーン大学を訪ね、歴史のある講堂、図書館なども見学する。

さすが様々な人種であふれる首都ウィーンは賑やかである。オペラ座の前よりリングという環状線の都電に乗り中心部を一巡りする。電車の路線沿いに、オペラ座、ホーフブルグ宮殿、国会、ウィーン市役所、国立劇場、ウィーン大学、ヒルトンホテルを初め外資系のホテルなどロマネスク、バロック、ゴシック風の建物が次から次へと見ることができた。夜オペラ座の立ち見席が案外簡単に買うことができ、プッチーニの「ラ・ボエーム」を鑑賞する。オーケストラはウィーンフィル、ウィーン少年合唱団も出演し、楽しい時間を過ごした。

ハプスブルグ家ゆかりのシュンブルーン宮殿、ベルベデーレ宮殿の庭園などを訪れる。

昼からは、アンゲラの八四才のおばさんを訪ねる。八三年住んでいるアパートの六階だが、見晴らしのよいベランダでおばさん手作りのルバーブのケーキでお茶をいただく。町の中だというのに、中庭に面したベランダは大変静かで、アムゼルがよい声で鳴きアムツバメもすいすいと飛んでいた。

ハンガリーとの国境にある大きな湖ノイジードラーの中の、ランゲラツケ湖他二か所を訪ねた。ここは広大なバードサンクチャリーとなっている。湖の周りには見渡すかぎりの草原、その中タゲリの類が抱卵しているらしく、『踏み込まないで：ピッテナニガシ：』と掲示されていた。出会った鳥は、感動してみたへラサギ、コウノトリ、ヨシキリ？、ヒバリ、ガン、カモ、カモメ、アジサシの種類、鳥オンチで詳しく分からないが、まして双眼鏡だけではとても分らない。草原の中にはカミツレ、オウシユウマンネングサ、ヒエンソウ、レンリソウ、マツムシソウなどが見られた。

帰りは、湖に近いコウノトリとワインで有名なルストという村による。小さい町の家々の屋根の煙突には、多くのコウノトリが巣を掛け、子育てをしていた。ホイリゲに入りワインを飲むが甘味の少ないさっぱりした味が気に入った。

メルク(デューンシユタインの間が、とても景色が素晴らしいとの事で一時間半のドナウ川下りの船旅をする。「美しき青きドナウ」を船で行くと、兩岸から岩山が迫り、ロマン秘められた古城が次々と見られ心地よい風を受け、あつという間にデューンシユタインの町に着いてしまった。遅くにウィーンに戻ると、アンゲラの就労ビザが下りた由札幌より連絡があった。まずは一安心。

翌日、バーデンにあるアンゲラのおばさんの別

荘に行く。庭の草刈りに来ていたアンゲラのお父さん、お母さん、弟とそこで合流する。昔よりバーデンは温泉保養地として有名ところで、温泉設備の整った大きなホテル、テルメが並んでいる。ただし、土産店のひしめく日本の温泉保養地のイメージはない。

裏のクロマツの林に白い実のつくセイヨウヤドリギがついていた。マツにもつくのだろうか……。

ハートベルグでゆっくり帰国の準備をし、帰りはソウルに寄り道をする(六・二一〜二八)

感激したことが二つあった。一つは庭で夕食をしていた時、何匹かのホテルがフワ、フワ飛んでいる、何十年ぶりに見るホテルである。何年来の農作物への無農薬化、低農薬化の結果であると聞き、何とも羨ましいかぎりであった。

もう一つは夜、猛烈なカミナリが鳴り出し変電所にカミナリが落ち停電となった。ロウソクをともした中で、電気がつくまで、アンゲラのお父さんが即興でピアノを弾いてくれ、ワインを飲みながら豊かな気分で一時的な闇を楽しんだ。しみじみと音楽の国を感じた次第であった。

二五日はアンゲラと弟のマーチンが車でウィーン空港まで送ってくれた。手続きをすませ、税関でタックス・フリーの証明印U三六の判をもらう。隣の銀行で円で約七〇〇〇〇円の割り戻しを受ける。オーストリアに来る観光客への利点、一〇〇〇シリング以上の買い物をしたときに戻る税金で、利用したお店で書類を請求すると記入、証明してくれる。そして出国のとき税関へ提出する。

夕方ソウルにつき、往きと同じホテルに二泊する。予約のツインルームがふさがり、どうしたわけか代

わりにスイートルームを用意してくれた。おかげで快適に過ごせ、日本の衛星放送でニュースを見、夜は映画を見て楽しんだ。

ソウル市内を二日間地下鉄を利用してウォッチングする。白凡広場にある安重根の記念碑、南山タワー、南山植物園、韓国の家、韓国王朝の李朝二七代にわたる王たちの廟所の宗廟、昌慶宮などを訪ねてみた。昌慶宮の庭には、エゴノキ、ハシバミなどがよく目につき、芝生にはカササギがたくさんいた。日本ではごく限られた所にしかないのにと、変なところで外国を意識した。

ソウルの空港も手続きがスムーズにいき、順調に千歳に到着した。

オーストリアはヨーロッパのはほぼ中央に位置し、七か国と国境を接している。北海道よりやや広く人口もほぼ同じ七〇〇万人、八つの州と首都ウィーンで成り立っている。

森林などは徹底的に管理され、計画的に利用され、木材としてアラビヤ、イタリヤ方面に輸出されている。

アムゼル(クロウタドリ)の声がいつでも聴かれ、農山村を車で通ると、シカ、ノウサギ、コウライキジなどが多く見ることができ、夜にはホテルが舞う。

農村リゾートのあり方など、私なりに考えることが多い旅であった。

マロニエの咲く頃訪れ、リンデンバームの咲き始めた一か月間、オーストリア流にゆっくりとした時間が流れ、経済優先の煩雑さの中に帰るのが一瞬躊躇踏された。